

裝藥

年、清水焼の藥蓋小く成て、やうく京升に一合入、是に準じて藥も少服になれば、病人の平愈もすくなし。

〔倭訓栞中編六〕くすりづ、み 藥を包むには、古へより法あり。

〔日本風土記四〕醫用〇中

藥包骨宿里子米

〔道三切紙〕當流藥劑調進之法則

一小紙ナラベ配スルニ、我前膝ノ際ヨリ向ヘ次第ニ並ルナリ、萬物下ヨリ生ズル也、易爻モ下ヨリ畫之、我左ヨリ右ヘナラベ重也、起精〇起精恐請假借ツギニナラヌ様ニト云心也、假令七包之時ハ、前ニ四ツ、向ニ三ツ也、天輕地重象之、

一小包ツ、ム時、打合シテ、我衣裳ノ打合ノ如ニツ、ム也、左リ前ニナラヌヤウニト也

一煎藥之銘ハ、必裏紙ノ内書之、三字五字可然也、

一大裏之時、紙二枚ナレバ、内ノ面ニ銘ヲ書也、紙一枚ナレバ、左ノ端ヲ折返テ銘書ベシ、

一七包ノ時ハ、我前ノ方ニ四包、向ニ三包並ルナリ、左リノ方ヨリナラベ始候、十五包ハ、五包ヅ、

三トヲリ並ル也、以上准之、

一銘ヲバ、煎ジ様ノトヲリヨリ一寸五分バカリサゲテ書ベシ、包數モ、銘ノハテヨリ、一寸五分バ

カリ間ヲ隔テ注之、

一煎様ハ

一ツ、ミニ、水天目一ツナガラ入、一ツニ煎ジワケテ、二フクニ、カスニ一ツ入ナガラニセンジ、

一フクニ、

一七歳ヨリ内ノ小兒ヘハ、劑包モコフクニ合ル也、